

グループ会話における自己開示と親密さの関係

伝研究室 16L1039F 森大河

1. 序論

1.1. 背景

社会集団の中で生きるわれわれにとって、他者と親密な関係を築くことは重要である。しかし、他者と親密な関係を築くのが得意な者もいれば、苦手な者もいる。その違いの一つは自己開示にあると考えられる。そこで本研究では、他者と親密になる方法の一端を明らかにするため、自己開示と親密さの関係を検討した。

1.2. 先行研究

- Jourard(1971)では自己開示を「個人的な情報を他者に知らせる行為」と定義した。
- 自己開示には、相手の自己開示の質や量に合わせて、自身の自己開示を調整する「返報性」があることが知られている。
- Altman & Taylor(1973)の社会的浸透理論では、二者関係の関係初期では浅い自己開示が多く、親密になると深い自己開示が多くなると考えられる。
- Weigelら(1972)ではグループセラピーの参加者たちの自己開示度と好意の間に正の相関が認められた。
- 中村(1984)では開示内容の社会的望ましさが中程度のとき対人魅力が高かった。
- 安藤(1981)では話しにくい話題を選ぶように誘導された被験者の方が、その話題を割り当てられた被験者よりも相手を好意的に評価した。

1.3. 目的

本研究の目的は、自己開示と親密さの関係を検討することである。本研究では先行研究でほとんど検討されていないグループ会話に注目し、継時的にデータをとることで、同じ状況、同じ相手に対して自己開示がどのように変化するかを検討した。また、他者と親密になるためには初期の印象が重要であると考え、関係初期における自己開示と好意の関係も検討した。さらに、同じ空間に親密度が異なる複数の他者がいる場合に、自己開示行動がどのように異なるかはほとんど検討されていない。そこで本研究では返報的自己開示に注目し、返報相手と親密度の関係について関係時期ごとに検討した。

2. データ

本研究では人文科学入門の授業における2班の合同班を対象とした。データには第1回と第14回の授業風景と、収録前後の親密度などを回答させた質問紙を使用した。本研究の参加者は、18～19歳の男女8名で、それぞれF1、F2、M3、M4、F5、F6、F7、F8とした（Mは男性、Fは女性を表し、AとDは教員を表す）。アンケートの結果、F5とF8は高校の同級生であること、F1とF2は新生歓送会、M3とM4は文学部ガイダンスで会話したことがあることがわかった。

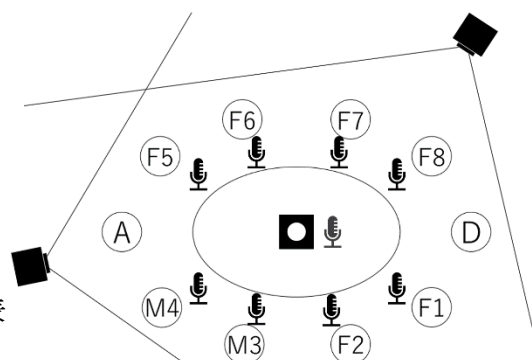


Figure 1. 装置と座席の配置

3. アノテーション

3.1. 開示内容の客観性

記述的自己開示：事実、情報、経験などの主観的な情報。

評価的自己開示：評価、感情、気持ち、欲求、考えなどの客観的な情報。

3.2. 開示内容の肯定性

肯定的自己開示：学習意欲、慈善活動の経験、得意なことなどの情報。

中立的自己開示：肯定的とも否定的とも考えられない情報。

否定的自己開示：怠惰な性格、不運な出来事、不得手なことなどの情報。

3.3. 開示状況の規範性

自発的自己開示：自分から先に自発的に開示された情報。

返報的自己開示：相手の開示後に自発的に開示された情報。

強制的自己開示：質問に答えて開示された情報。

4. 分析 1 自己開示の継時的変化

4.1. 方法

1秒間の自己開示発話数を自己開示度とし、第1回と第14回の自己開示度を分析した。自己開示度に対して、時間経過の1要因、開示内容の肯定性と時間経過の2要因、開示状況の規範性と時間経過の2要因の3つの分析を行った。分析には線形混合効果モデルを用いた。

4.2. 結果と考察

まず、時間経過にともなって自己開示度が有意に増加した(Figure 2)。この結果から、時間経過にともなって相互の親密化が進み、好意や信頼感が増したことで、開示できる量が増加したと考えられる。また、好意や信頼感が増したことで、さらに親密になろうと動機づけられた可能性が考えられる。この考察が正しければ、自発的自己開示が増加したことが予想される。

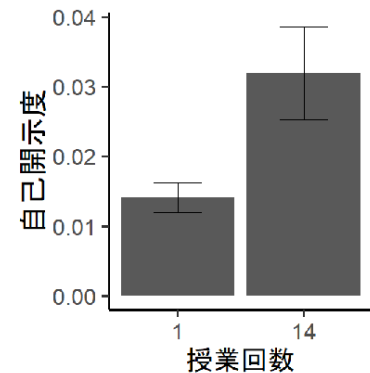


Figure 2. 分析 1-1 の結果

次に、開示内容の肯定性と時間経過の間には交互作用が認められた(Figure 3)。下位検定の結果、中立的自己開示のみ時間経過によって増加し、どちらの時点においても中立的自己開示のみ有意に多かった。この結果から、班員たちは関係初期において肯定的自己開示を行うことで良い印象を与えようとするのではなく、関係が親密になっても否定的な側面をさらけ出すことはないということがわかった。またこのことから、実際の会話では肯定的自己開示を行いつらい規範がある可能性がある。

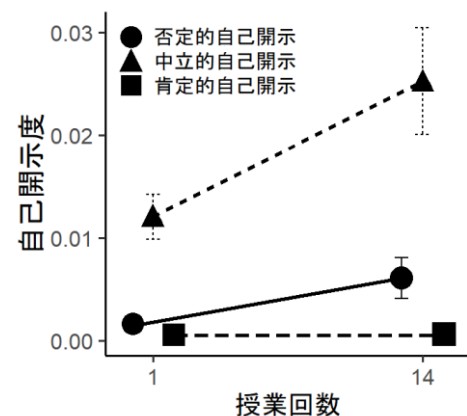


Figure 3. 分析 1-2 の結果

さらに、開示状況の規範性と時間経過の交互作用が有意であった(Figure 4)。下位検定の結果、自発的自己開示のみ時間経過によって増加し、第14回の時点でのみ自発的自己開示と返報的自己開示の間に有意な差が認められた。この結果から、班員たちは時間経過にともなって好意や信頼感が増したことで、自分から自己開示を行おうと動機づけられたと考えられる。また、返報的自己開示が減少しなかったことから、信頼関係が一定の水準に達していなかった可能性が考えられる。

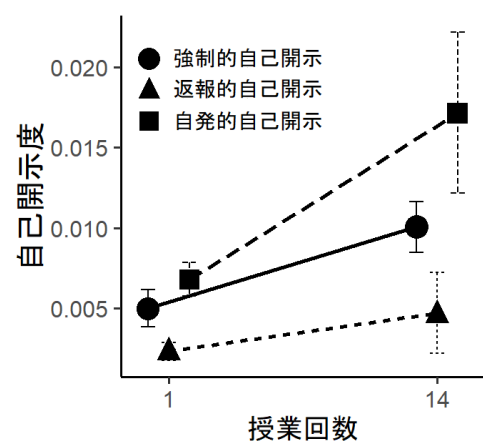


Figure 4. 分析 1-3 の結果

5. 分析 2 関係初期における自己開示と好意の関係

5.1. 方法

収録前後の開示者の他者からの好意度の上昇量を計算し、自己開示度の1要因、肯定的自己開示度の1要因の2つの分析を行った。また、開示者の他者への好意度の上昇量を計算し、自己開示度の1要因で分析した。分析には線形混合効果モデルを用いた。

5.2. 結果と考察

まず、他者への好意度の上昇量と自己開示度に有意な関係が認められた(Figure 5)。本研究の結果からは両者の因果関係は明らかにできないが、先行研究と同様に自己知覚理論から考えれば、自己開示を多く行った班員は、自身の開示動機を他者への好意に帰属した結果、他者への好意度が上昇した可能性が考えられる。

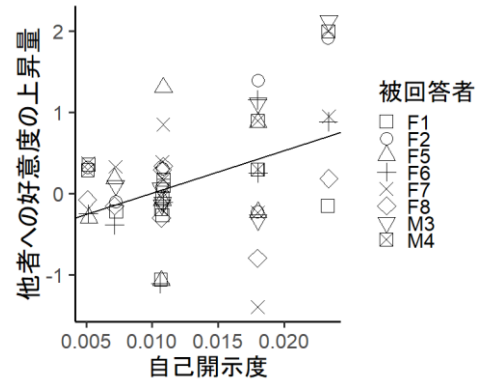


Figure 5. 分析 2-1 の結果

また、他者からの好意度の上昇量と自己開示度の間に有意な関係は認められなかった(Figure 6)。このような結果となった理由として、収録前の好意度が高かった班員はそれ以上好意が上がりづらかった可能性が考えられる。また、自己開示度と他者への好意度の上昇量に相関があったことから、自己開示度が高い班員は他者に高い好意度をつけたが、自身は自己開示度が低い班員に低い好意度をつけられたため、他者からの好意度の上昇量が相対的に低くなったと考えられる。

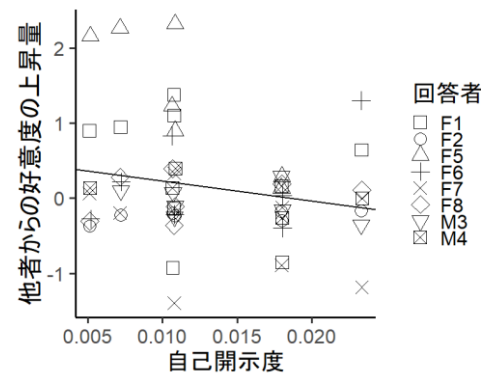


Figure 6. 分析 2-2 の結果

次に、他者からの好意度の上昇量と肯定的自己開示度の間に有意な傾向は見られなかった(Figure 7)。このような結果となった理由として、肯定的自己開示が否定的自己開示と同程度であったために効果が相殺された可能性が考えられる。また、8人中4人が肯定的自己開示をまったく行わなかったことから、数が非常に少なかったために効果が見られなかった可能性が考えられる。

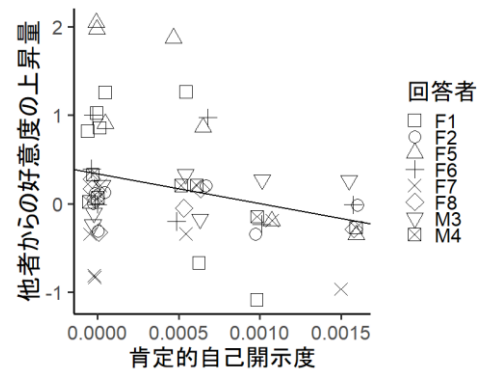


Figure 7. 分析 2-3 の結果